

はじめに

私たちは、小さな子どもの時から、衣食住の基本、社会のルール、人間としての望ましい在り方などを教えられてきた。個人差はあるにせよ、私たちは次第にそれらを身につけ、社会生活を送ることができるようになっていく。それらは、「ふるまいの仕方、態度の取り方」と言ってもよいだろう。わが国では、学校でも道徳としてそれらが教えられている。したがって、学校教育において道徳に関することは、その他の教科の学習などとならんで重要なテーマだと言ってよい。小学校、中学校においては、すでに1950年代から道徳の授業時間が設定されているが、新たに2018（平成30）年からはそれが「特別の教科道徳」となり、教科用図書を使用して道徳教育を推進していくことが求められるようになった。

しかし、学校で道徳を教えることは、その他の教科内容を教えることとは勝手が違うように思われる。たとえば数学であれば、計算のルールや面積の出し方を教えたり、数式を使って仮定を証明する手続きを教えたりする。理科であれば、物質の構成を教えたり、自然界の法則を教えたりする。

ところが、道徳の場合は、その他の教科とは異なって、そもそもその教えるべき内容がはっきりしない。食事の仕方や衣服の着用など、日常生活を営む上での基本的な決まりごとから、「人に暴力を振るってはいけません」といった一般化された平易な規律、「自分がして欲しくないことは人にもしてはいけない」（黄金律）といった古くから引き継がれている知恵のようなもの、「目標に向かって努力し、立派な人間になる」といった精神修養のようなものまで、実にさまざまなことが道徳の内容であるように感じられる。総じて、「ふるまいの仕方、態度の取り方」は、個人の考えやそれぞれの状況によって異なるので、それらに応じた特定の「ふるまいの仕方、態度の取り方」を一つ一つ教えることは著しく困難である。

加えて、道徳に関することは、たとえ子どもたちがそれを教わったとして

も、実際にそのようなふるまいができるかどうかははっきりしない。つまり、たとえば子どもたちが黄金律を教えられたとしても、実際に黄金律に従ったふるまいができるかどうかはまったく別の問題のように思われる。そうであれば、道徳を教えても形式的であり意味がないのではないか、という疑問さえ生じてしまう。そうすると、道徳は学校で教えるようなものではなくて、習慣のごとく勝手に身につくようなもので十分ではないのか、とも思えてくる。

本書では、まずは前半の理論編にて、このような道徳や道徳教育に関するさまざまな問題を追究してきた思想や理論が取り上げられている。ここでは、特徴的で重要な道徳に関する思想や理論をていねいに紐解き、わかりやすく提示することを試みている。そして、わが国の学校教育で道徳がどのように取り扱われてきたのか、その理論と歴史的背景を明らかにする。後半の実践編においては、学校における具体的な道徳教育の実践を取り上げ、道徳教育の現状を把握し、これからの道徳教育はどのようにあるべきなのかを考えていくことにする。

学校における道徳の授業の実践については、学習指導要領に基づいたさまざまな資料が学校に提供されており、典型的な授業展開例が書籍やデータベースなどで豊富に用意されているので、そのようなものを参考にすれば、上手く授業ができるようになるのかもしれない。しかし、「ふるまいの仕方や態度の取り方」は、おそらく、一定のパターンに従って授業を行えば身につくようなものではなく、子どもたちが「どのようにふるまうべきなのか」という問いにさらされながら、それに応えようと向き合うなかで少しずつ具現化されるようなものである。私たち道徳教育に関わる者は、そのような問いに向き合う子どもたちを前にして、躊躇^{ちゅうちょ}やためらいもなく無自覚にお決まりの型や方向性を適用してはならない。むしろ私たちは、さまざまな理論や実践を参考にし、実際の子どもたちのふるまいを引き受けつつ、惑いながらも道徳教育を私たちの手で創りあげていかねばならない。

筆者一同、読者の皆さんには、本書の全体をとおして、学校における道徳教育の在り方を追求することはもちろん、道徳というものをどのように扱えばよいのか、さまざまな視点から深く考えてもらうことを望んでいる。

道徳教育の理論と実践

目 次

はじめに i

理論編

第1章 道徳における知と行為 — プラトンの問い — 2

- 1. 道徳的であるとはどのようなことか 2
- 2. ソクラテスとプラトン 4
- 3. 徳（アレテー）の問題と『プロタゴラス』 5
- 4. 『メノン』における徳の問題と探求のパラドクス 7
- 5. 『メノン』における徳と知識 10
- 6. 徳とは何であるか、を問うこと 14

第2章 道徳と習慣形成 — アリストテレスの倫理学と人格教育 — 16

- 1. アリストテレスの倫理学 16
- 2. アメリカにおける人格教育 23

第3章 西洋思想における道徳観 31

- はじめに 31
- 1. 功利主義 32
- 2. 義務論 35
- 3. 徳倫理学 41
- おわりに 43

第4章 知識論と道徳教育 — デューイとポパーの知識論から — 45

- 1. 「事実の学習」と道徳教育 45
- 2. 「知識」に含まれる「倫理性」 47
- 3. 「私はどこにいるのか？」の問いと「総合的な学習」 49
- 4. 「探究の理論」と「知識の暫定性・可謬性」 52

5. 「知識」のもつメッセージとの出会い	54
6. なぜ絵本の「読み語り」なのか？	57
第5章 道徳性の発達	60
1. ピアジェの道徳的発達論	60
2. コールバーグの道徳的発達論	66
3. モラルジレンマ教材を活用した授業	72
第6章 日本思想における道徳観	75
1. 2つの価値観—生命本位と理性主義—	75
2. 2つの価値観の分布状況	77
3. 日本思想に一貫する価値観—生命本位—	80
4. 理性主義の道徳観	82
5. 生命本位の道徳観	85
第7章 日本における道徳教育の展開—戦前—	90
1. 修身教育の始まり	90
2. 教育勅語の成立	93
3. 国定教科書制度下の修身教育	95
第8章 日本における道徳教育の展開—戦後の指導法の変遷—	103
1. 戦後教育改革と道徳教育	103
2. 教育基本法・学校教育法成立と道徳教育の方向性	105
3. 社会科新設と道徳教育	106
4. 学習指導要領第二次改訂と特設「道徳」の設置	107
5. 「期待される人間像」をめぐる議論	111
6. 昨今の道徳教育にかかわる改変	112
7. 「特別の教科 道徳」登場の背景と展望	114

第9章 道德教育の課題と可能性	118
1. 「共同生活」と「呼びかけ—応える関係」	118
2. 空虚化した道德の基盤	121
3. 「学びの共同体」としての学校づくり	124
4. 道德の基盤の再構築	129

実践編

第1章 道德教育と学習指導要領	134
1. 道德教育の本質・意義	135
2. 教育活動全体を通じて行う道德教育	138
3. 「特別の教科 道德」	143
4. 道德教育の実施体制と指導計画	146
第2章 幼児期における道德教育	151
1. 就学前教育・保育と道德教育	151
2. 園児の道德性・規範意識の芽生えを育む教育・保育の実践事例	153
第3章 小学校における道德教育①	158
第4章 小学校における道德教育②	165
第5章 中学校における道德教育	172
第6章 高等学校における道德教育	179
第7章 特別支援学校における道德教育	186

おわりに	193
資料編	195
事項索引	224
人名索引	229
執筆者一覧	231

※本書では、引用・参照した文献を一括し、参考文献として章末に挙げている。原書と訳書の両方がある場合は、訳書のみを挙げているが、適宜原書を参考にして訳文に変更を加えていることがある。